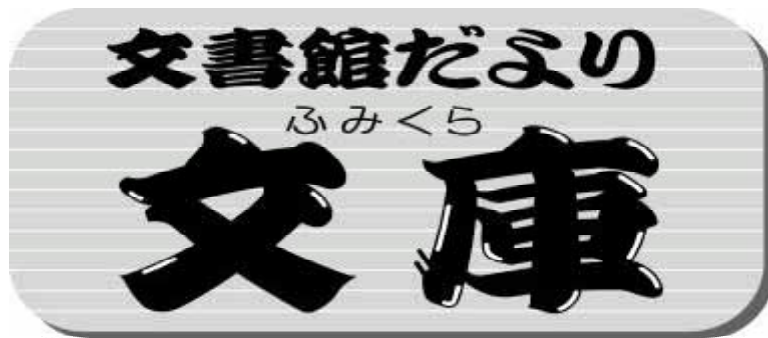




第 11 号

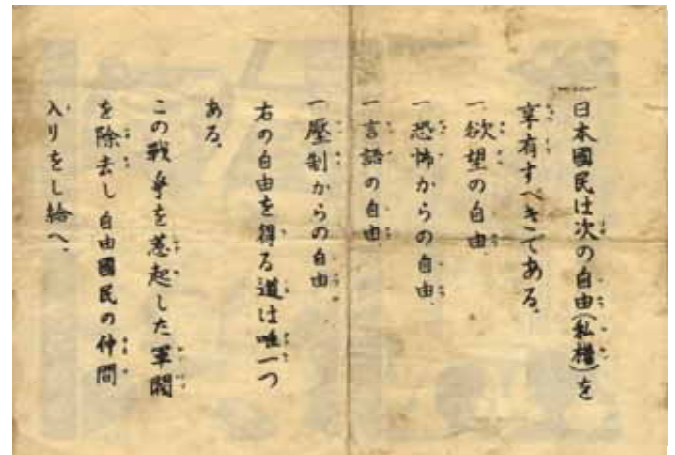
2007年8月31日発行

藤 沢 市 文 書 館

Fujisawa city archives

〒251-0054 藤沢市朝日町12-6

電話 0466(24)0171 FAX 0466(24)0172



降伏勧告ビラの表(左)とその裏(上)

【写真解説】

上に掲げた写真は、アジア太平洋戦争末期の昭和19年（1944）から翌20年にかけて米軍によって藤沢市域に散布された、さまざまな降伏勧告ビラの中の一枚の表と裏を示したものです。実物の大きさは横140mm×縦109mm、モノクロ印刷で裏面に「No2007」と記されています。

表では、4コマの絵が描かれ、それぞれ「恐怖からの自由」「欲望の自由」「圧制からの自由」「言語の自由」という見出しがついています。また、裏には、これら4つの自由を得る道は「この戦争を惹起(じゃっき)した軍閥を除去」することと記されています。

これらの降伏勧告ビラは「伝単」(でんたん)と呼ばれ、戦争中各国によって盛んに散布されました。米軍による伝単は、昭和20年2月16・17日に初めて日本本土(関東・東海

地方)に散布され、日本降伏までに458万4000部が全国にばらまかれました。内容も色刷りのグラフで日本の資源依存を暴露するものや、10円札の模様の裏に日本の経済の劣悪化を描くものなどさまざまです。

しかし日本は同年3月10日、「敵ノ文書図画等ノ届出ニ関スル件」を制定して、伝単を発見した者は警察・憲兵隊に届け出る義務を課し、違反者に対しては3か月以下の懲役もしくは拘留、または100円以下の罰金過料に処しました。また、密かに所持されていたものも空襲などで焼失したため、現在では伝単はほとんど残っていません。(中村)

< 参考文献 >

『東京大空襲・戦災誌』第3巻(東京空襲を記録する会、1973年)、一ノ瀬俊也『戦場に舞ったビラ』(講談社選書メチエ384 2007年)

旅人が見た江戸時代の藤沢（３）

- 高山彦九郎の見た江ノ島 -

勤王家の高山彦九郎（1747～93）は、上野国新田郡細谷村の出身で“寛政の三奇人”の1人とも称された人物です。13歳で学問を志し、18歳で京都に遊学して尊皇思想に傾斜していったといわれています。

彦九郎は、既に安永3年（1774）にも旅の途中で鎌倉・江ノ島を訪れていますが、今回は安永9年に富士山へ登った際の旅日記『富士山紀行』から、彦九郎の見た江ノ島についてを見ていきたいと思えます。

● 江ノ島へ

彦九郎は、富士登山の帰路、安永9年7月21日に江ノ島を訪れました。19日の夜から降り続いた雨の影響で六郷の渡し（多摩川）が渡れないと判断して、「巳待ち」の日（翌22日が巳の日に当たった）でもある事から、急遽江ノ島参詣を決めています。

「巳待ち」とは、巳の日の前日の夜に集まって行われる日待の一種であり、弁才天の縁日が巳の日にあたるので江ノ島を訪れることにしたのでしょう。

● 岩本院を訪ねる

江ノ島へ渡った彦九郎は、以前親しくなった岩本院の住持を訪ねました、

江ノ嶋、カラ（唐）金の鳥居を入り上り行、町家五十軒、左り下の坊、右二岩本坊、予此二至而（イタリテ）一宿を乞ふ、昔年祖叔二従て来し時、住寺（住持）甚懇意を結ぶ故二尋ぬれ共、三四年以前死而（シシテ）今ハ八王子高尾山の弟子を養子として嗣くと云、余強而（シイテ）一宿を乞共許さず、然八町宿へ案内あれといへは承ハリぬとて渡部四郎兵衛成者の所二案内す遂二爰に宿る、宿人我を知ル先年休ひし家成り（（ ）内は加藤、以下同）

ところが、訪ねた住持の宿全は安永六年に亡くなって養子の秀明が岩本院を継いでおり、宿泊を断わられてしまいます。あてがはずれた彦九郎は、新しい住持に紹介して貰った渡部四郎兵衛方に宿を決め、江ノ島見物に出掛けます。

● 江ノ島を見物

下ノ宮・上ノ宮・奥院・岩屋を巡り、狛師町では聖天島などを見物しています。狩野派絵師の書いた絵馬、運慶作の獅子、左甚五郎の彫った龍などを見物し、十六文で「江の嶋の図」を購入しています。見物したものの由来に関しては、「皆社僧の語所ヲ爰二記す虚実を不弁（ベンゼズ）」として、その真偽に疑義を呈しています。

また、狛師町にあった圓可寺では、普段は遠眼鏡を使って稲村ヶ崎から三浦海岸にいたる対岸を見物できたようですが、この日は遠眼鏡が貸出されていた模様で、寺の僧が説明をしてくれています。

● 「巳待ち」の様子

その後、一度宿に戻って「食し、湯入、礼拝し、海浜二行き清め侍て、登て嶋姫の神社三社共二拝礼

し」て、奥院で「巳待ち」をしています。この時の江ノ島の様子を、

今夜巳待なれば麓ノ一ノ鳥居より当社二及ぶ迄燈らふ（灯笼）つく、大水舟のとまりたる故二参詣ハすくなし、通夜の者も数人二過す

と書いています。大雨の影響もあって参詣者は少なかったようですが、一の鳥居から奥院まで灯りが灯されていました。この夜彦九郎は、先住の宿全を偲んで奥院の僧や龍口明神の別当らと語りました。

深夜の岩屋周辺の様子についても、「月おほる二して海上の望ハ系ならずなれ共、心開けて仙境の思ひをなす」と記して、江戸時代の夜の江ノ島についての貴重な感想をのこしています。

彦九郎は、夜が明けてからもう一度岩屋・上ノ宮・下ノ宮に参詣し、藤沢へ出て江戸に向かいました。

● 弁才天について

彦九郎はこの「富士山紀行」において、弁才天を必ず「嶋姫」と記しています。その理由は、

江ノ嶋より寅の方半里、龍の口ニ有所の龍口明神は山住ミテ人の子を取合ひ人民のがれて海辺ニこす故其所を腰越村と云ふ、弁才天此を憂而（ウレイテ）龍蛇を夫婦のかたらひ有て人民患を止めり、遂ニかの龍蛇を八龍口明神と祀れりなど伝者の妄説有、笑ふへし、江の嶋神社巖嶋神竹生嶋の神社共ニ嶋姫の三神なるを伝徒此を強而弁才天女と称す僧徒の虚偽、悪ぬ（ニクム）へしにくむべし

『江嶋縁起』などによって、江ノ島の祭神が弁才天とされていることを「伝者の妄説」と断定し、弁才天垂迹以前の「嶋姫」とされるべきだという彦九郎の信条によるものでしょう。これを「僧徒の虚偽、悪ぬへしにくむべし」と強く責めている姿は、まさに“奇人”と称されるに相応しい態度ではないでしょうか。（加藤）

< 参考文献 >

高山彦九郎先生遺徳顕彰会編『高山彦九郎全集 第一集』、岩本二郎『江の島岩本楼今昔物語』など



江ノ島岩屋（「相中留恩記略」福原家本）

陸奥白河藩主松平定信は8代将軍徳川吉宗の孫にあたり、江戸幕府の老中として寛政の改革を主導した人物として知られています。寛政の改革は、綱紀粛正や俸約令、農村の復興や商業・思想の統制など引き締めを中心とした政策であり、定信も堅物な印象がありますが、古物の愛好家という一面も持っています。

定信は「集古十種」という古書画・古器物・古武器類の実測図をまとめた本の編集も行っており、古物の考証や鑑賞にも大きな影響を与えたとされます。こうした仕事の一環として、2度にわたり遊行寺の宝物も調査されており、「集古十種」には遊行寺の扁額と梵鐘が採録されています。



清浄光寺宝物より 「一遍上人絵詞伝」竜口の場面

「藤沢山日鑑」(7巻掲載)には次のように記されています。

天明8年(1788)6月26日、松平越中守(定信)が、江戸へ向かう途中で立ち寄り、上人と対面し御札などを受けます。ついで戸塚に宿泊するので、戸塚の本陣で宝物を拝見したいと依頼をしました。そこで遊行寺では宝物18品を長持ちに入れ、絵解きをする僧など2人が戸塚へ持参し、定信に見せました。その際、宝物の縁起を逐一記録したいので話をしたい、今が無理なら後で書付にしてくれないか、と請われます。そのため先に頼まれていた遊行寺の開基についてや諸堂間数とともに、書付にして御屋敷へ差し出すことにしました。

その後、寛政5年(1793)に、再び調査が行われました。「藤沢山日鑑」(9巻掲載)と「徳川実記」によると、この年沖に異国船がしきりに見えるため、定信は3月18日に海岸巡視のため江戸を離れます。この旅には画家の谷文晁も随行しています(岩間眞知子「集古十種について」『集古十種 第一』より)。その晩は戸塚に泊まり、翌19日に遊行寺で休憩した際、後日宝物を見せてほしいと申し出をします。そして、伊豆や相模、大島などを巡見の後、4月1

日に藤沢宿を再訪し宿泊しました。遊行寺で宝物拝見について意向を尋ねたところ、「一遍上人絵詞伝」と「公方家書簡」を借用したいとのことであり、よんどころなく貸し出すことになりました。

返却は寛政7年9月20日と、かなり長期に亘りました。定信はその間写しを作らせていたのです。そのため取り扱う頻度が多く、袋が損じてしまったとして、別の袋を添えて返却したと日鑑には記されています。その袋は表が唐緞子、裏が萌黄の絹糸打、紫の紐がついていたそうです。さぞや立派な物だったでしょう。また、お礼として狩野洞元筆の七福神遊樂の絵巻などが奉納された、とも記されています。ただこの絵巻は、遊行寺が所蔵する什宝目録によると、のちに甲府の人へさしあげてしまったということで、遊行寺には残っていません。

貸し出された「一遍上人絵詞伝」は明治44年に焼失した「古縁起」だと思われていますが、この時の模本に該当する絵巻については不明です。ただ文晁が文化13年(1816)に作成した模本があるそうで、これの草稿となったのかもしれませんが。

なお返却の際、借用証を返すように言われますが、受け取った衆領軒(遊行寺の首役の僧)が留守で、あちこち探しても見つかりません。仕方なく衆領軒が帰ったら後日返送しますと回答しました。「担当者不在でわかりません」というのはいつの世も同じですが、ひと事ではなく気をつけたいと思います。

ところで、遊行寺からも定信に依頼をしました。境内北西の山上にあった茶屋に、額の染筆を願ったのです。寛政5年4月1日のことでした。定信は「江戸表へ帰次第何ぞ認可進」と引き受けてくれました。

その後8月19日に額が届きましたが、使者が来るまでそのまま置き、9月6日になって正式に拝領、開封されました。定信がつけた名前は「清音」です。額は朴(ホオ)の木製で、その二文字が白字で彫られていました。これ以後、茶亭は「清音亭」と呼ばれるようになり、そのエピソードは小川泰堂「わが住む里」や平野道治「雞肋温故」、「新編相模国風土記稿」にも記されています。なお清音亭について詳しく知りたい方は『藤沢山日鑑 第10巻』解説、高野修「清音亭について」をご覧ください。



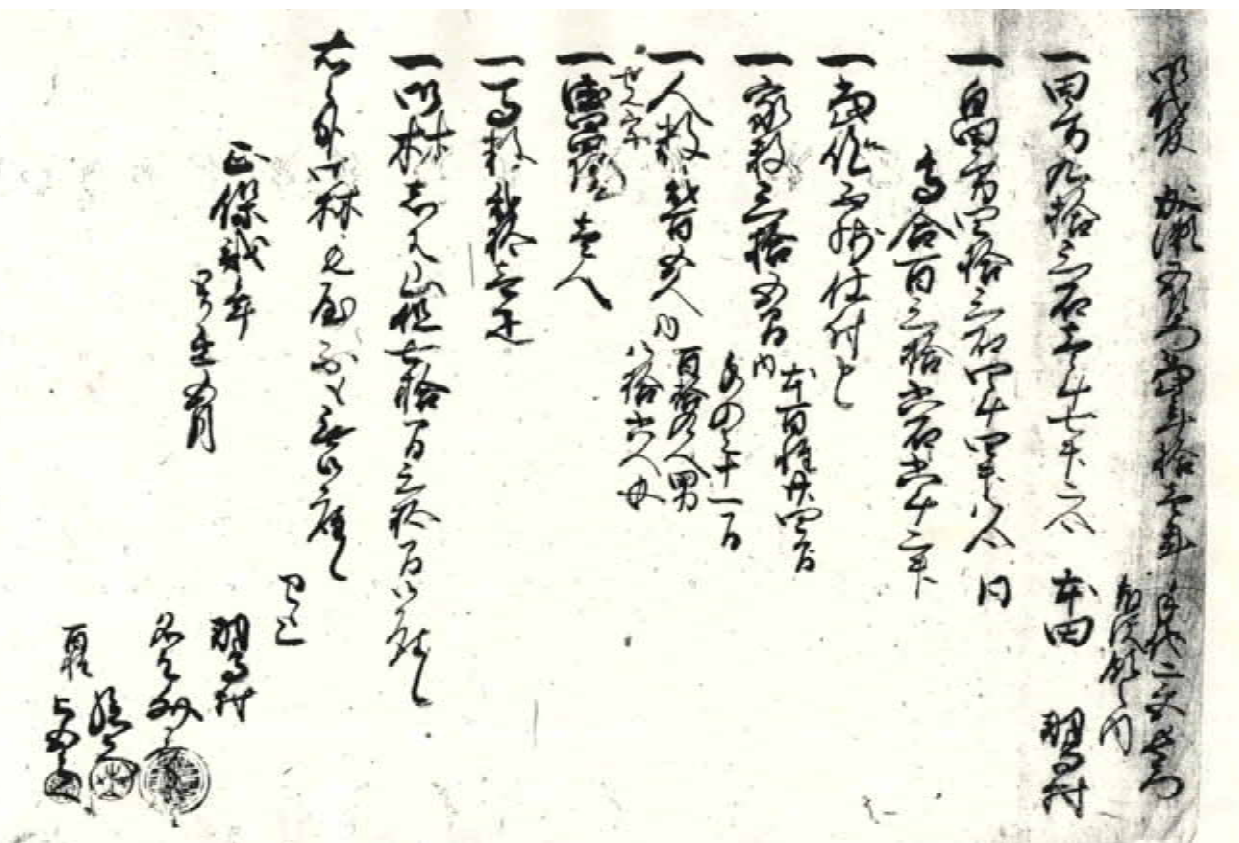
境内図にみえる「茶亭」(右上)

(酒井)

<問題>

次の古文書は、村の様子について書き上げた文書ですが、この文書は、後に近世村方文書の基本的帳簿の原型となった文書として評価されています。その帳簿の一般的名称は何といいますか？

(解答と解説は次号に掲載します。)



ふじさわ地域史ミニ事典

高座豚（こうざぶた）

高座豚は、中ヨークシャー種を改良して高座郡で飼育された肉用種豚の総称です。このブランドが有名になったのは、昭和10年(1935)に東京・芝浦で開催された全国畜肉博覧会で、当時の綾瀬村から出品された2頭が優秀な成績をおさめてからです。藤沢市域では、菖蒲沢地区の養豚組合が中心となり、組織的に地域全体を種豚の生産地に切り替えました。そして、昭和恐慌で強まる農村不況の中で、経済更生を果たす原動力となったのです。

ちなみに当館には、「菖蒲沢養豚組合之沿革」(昭和期)や養豚組合関係書類など関係資料が保管されています。

<参考資料・文献>

- ・八田恵子「菖蒲沢養豚組合の成り立ちと活動」
(『藤沢市史研究』第35号、2002年)
- ・『神奈川県百科事典』(大和書房、1983年)



高座豚の品評会 昭和15(1940)年3月15日

編集後記

今回は、アジア太平洋戦争末期に藤沢市域に散布された米軍の降伏勧告ビラ(伝単)について取り上げました。

また、本号から「ふじさわ地域史ミニ事典」のコーナーを設けました。ふじさわ地域史の事項について、簡単な解説と、できれば写真もあわせて掲載していきたいと思います。

「文庫」の記事についてのご感想、ご意見などありましたら、文書館までお寄せください。読者の皆様のご意見によってより良い内容にしていきたいと考えております。

最後に、本号の刊行が大幅に遅れましたことを心からお詫び申し上げます。(中村)